



五自治区を基盤とした 防災まちづくり ～自分たちで助け合い 災害から命を守る～



三重県 伊勢市浜郷地区まちづくり協議会
防災総合委員会 委員長 西井 文平

1 はじめに

浜郷地区まちづくり協議会は、浜郷小学校区の5自治区で構成され、平成25年2月に設立した人口5千人、22百世帯の地域です。

地区の防災活動は、東日本大震災以降、大津波による浸水想定により高台避難計画が必要不可欠となりました。

浜郷地区は、伊勢湾へ注ぐ勢田川の下流域に位置し、海拔が0m～1m前後と低く南海トラフ大地震による3mの最大津波高により大災害が予測されています。

協議会の発足に当たり、5自治区の重点課題を防災対策として「自分たちで助け合い、災害から命を守る」をテーマとして防災まちづくりがスタートし、現在第3次「防災3ヶ年計画」の9年目の活動に取り組んでいます。

2 第1次「防災3ヶ年計画」 (H25/2～H28/3)

南海トラフ地震の発生確率が今後30年以内70%と報道され、広域災害への課題（被害想定、危険箇所、避難方法、役割分担、避難所運営など）が山積しており、災害対応の知識を得るために災害講演会や防災検討会を何度も開催し対策の検討を行いました。

初年度は防災アドバイザーの協力を得て、地域住民の災害理解を得るため、各自治区で防災講演会やタウンウォッチングを実施し、危険箇所を記載した避難経路地図を全



小学生児童による防災教育（HUG）

戸に配布しました。また、5自治区が住民への防災訓練の参加を呼びかけ、浜郷地区全体での初めての避難訓練と防災講演会を行いました。

2年目には、防災リーダー向け防災講座として地震津波講演会と避難所運営ゲーム（HUG）を各自治区にて開催、多くの地区リーダーや小学校の先生方に参加頂き、地域防災活動の必要性を学びました。その後、浜郷小学校では、6年生を対象に、防災教育として災害講習とHUGが開催され、子供たちの災害理解が進み災害対応への自主性が大きく変わりました。

3年目には、防災委員会の毎月開催により、避難訓練の内容も「災害発生対応、避難誘導、安否確認、防災講演、炊出し」など広範囲となり訓練参加者も603名となり、5自治区全体の訓練体制が定着化し基本的な防災体制づくりの第一歩を踏み出すことができました。

3 第2次「防災3ヶ年計画」 (H28/4～H31/3)

第2次の3年間は、「地区防災計画」に必

要な訓練の実施と、自主防災組織の育成（地区リーダー養成）、住民の防災訓練への参加を課題としました。

地区防災活動に必要なのは、各自治区の防災リーダーであり、災害対応について考える訓練である「災害図上訓練」を開始しました。この訓練は、8名程の各班に分かれ、地域地図に災害時に必要な確認事項を書き出し、その後、災害シナリオへの対応方針を決定していくものです。活発な意見交換の中で「災害を知る、地域を知る、人を知る」ことの重要性を痛感する訓練でもあります。初年度は128名が参加し、防災リーダーの役割が明確になり組織の方向性が見えてきました。

平成31年3月には、6年間の防災活動を総括し、地区防災マニュアル（防災計画）を作製し全戸配布、今後の訓練の基本資料として活用することとしました。



避難訓練後の防災講演会



災害対応訓練（災害図上訓練）

4 第3次「防災3ヶ年計画」 （R元年～R4/3）

第3次の計画は、従来の「津波総合避難訓練、災害図上訓練、HUG、防災講演会等」の継続開催に加え、①自助・共助・公助について行政との連携や情報連絡網の確認、②災害弱者（要支援者含む）対応についての訓練を課題としました。

令和2年度は、コロナ禍の訓練となりましたが感染防止対策を検討し、どのような開催方法であれば実施できるのかを話し合い、参加対象や訓練内容を変更し実施してきました。結果、災害時のコロナ対策について住民の理解が得られ、日常のコロナ対応についての周知も進んだと思います。



コロナ禍での受付講習（防護服の脱着）

5 終わりに

8年間の活動を踏まえ「地域防災」に必要な事は、①地域の組織化と共助の体制づくり、②地域の防災リーダーづくり、③多くの住民参加を得た防災訓練の継続、④住民への防災情報の周知などです。

訓練を繰り返すことで「自助」の幅を上げ、顔の見える関係を築くことで「共助」の力を高めることができます。引き続き、地域のコミュニティ活動を推進し地域防災力の向上を図っていきたいと思っています。